

健康文化

## 北欧の旅雑感 福祉の原点は“親ばなれ、子ばなれ”から？

久我 正

8月31日（土）から9月7日（土）の8日間、「あいち健康の森」の施設および運営面に参考となるものを求めて、知事のお供をして、スウェーデン王国とフィンランド共和国を訪問した。

我々の目的は、リゾート型の高齢向け、リハビリ及び健康増進施設とも云えるスウェーデンの **Saetra Brunn**（ゼトラブルン）とフィンランドの **Naantali Spa**（ナーンタリスパ）の見学であったが、紙面の都合上、私は今回の北欧旅行の目的の中に、我々の最も重要なテーマともいえる長寿に関連して、個人的に、両国の老人問題を中心とした両国民の基本的な考え方を、短い日数の中ではあるが、探ってみたいと思っていたので、雑感風にまとめてみた。

標題に使った“親ばなれ、子ばなれ”は、今回、我々の旅行のガイドをつとめた二人の婦人と我々（岩塚総合保健センター所長、中日新聞竹村記者と私）のために、特別に時間を割いてくれた「スウェーデン人はいま幸せか」の著者で、ストックホルム大学研究員の訓覇（クルベ）法子さんとの会話の中から感じとったことである。

これが、全てのスウェーデン人を、そしてフィンランド人を的確にとらえているかは自信がない。その内容も三人の婦人から「そんなこと云った覚えはない」とお叱りを受けるかも知れない。私自身の心が入っていることも認めておきたいと思う。

ガイドの一人は、ストックホルム在住の日本人女性で、現地の人と結婚され、在住20年とか。年齢は不詳、多分30～40歳だと思えた。名はノリコさんと云った。もう一人は、ヘルシンキ在住の現地人、**Hanna**さんといって、ヘルシンキ大学日本文化専攻のお嬢さん。ただ、彼女は中学まで徳島で生活していた。日本人以上に日本人らしい立居振舞いで日本語を話し、私の名前も正しく

「久我」と記した（多くの日本人は「久賀」と書く）のには驚いた。

彼女達は「この人達は、いったい何しに来たのだろう」と思っているのではないかと、今になって考えている次第である。公式の訪問は真面目に見学したことは声を大にして云っておきたいが、市内の案内も、通常の人々が入るであろう「支庁舎」であるとか、「博物館」であるとかいった所には、あまりまじめに入らず、説明を聞いても、すぐに質問が市民の生活とか、物の考え方になってしまう。そして休憩でコーヒーショップにでもはいれば、すぐに例のごとく質問攻めというか、人生論的な話し合いになってしまう。Hanna さんとは、Naantali Spa での夜に、滞在者や近隣の人が生バンドを楽しみ、ダンスを楽しんでいる中でビール・ウィスキーを飲みながら、フィンランド人の物の考え方と日本人といったことについて語った。気が付くと12時近くであった。

三人の女性の話を総合すると、両国とも、老人の自立心が強く、援助して欲しい時には、はっきりと援助を求めもし、有難く受け入れる。しかし、それ以外は自分の生活を守っているという。その考え方については、子どもも周囲の人も当然だとの考えを持っているようである。

また、子供に対しても、同様、高校を卒業と同時に自立の道を歩かせているとのこと、Hanna さんにしても、多くの大学生と同様に大学に入った時から親元を離れ、親の協力無しにガイドへのアルバイトをしながら、大学生活を送っているとのこと。これを子供も当然のこととして受け止めているし、社会全体の考え方のようなのである。

その意味では“親ばなれ、子ばなれ”が完全に出来ているのである。見方を変えれば「個」が確立された社会といえるのではないかと、そして、親が老いてきても、本人から援助の申し出がないかぎり手を差し伸べないという。「子供だから親を見なければいけない」とも思わないし、親も子供に要求しないという考え方が確立しているのである。しかし、こう書くと日本風にいうならば、「冷たい子供だ」とか、「親不孝者」とかいった言葉がでそうだが、彼らは、決して冷たいのではなく、援助を求められるまでは、たとえ、親だとして求められないことに手を出すことは、失礼だとの考え方なのである。こうすると、日本人は「親は助けて欲しくても云えないのだ。それがわからんのか」とくる。これも考え方が全く違うのである。親も援助を求めるときには、素直に云うのが当たり前と思っているのである。これは身障者についても同じである。弱者であるこ

とは、お互いに十分認識しているのである。援助が欲しいときに求めることがあたりまえの社会、その時に援助が差し伸べられる社会、これを確立したのが、福祉先進国の基本であるのではと教えられた。スウェーデンにおいては平等が基本であり、全ての弱者と社会的に援助することにより、平等の権利を国民が享受しているのである。こうした、基本的な考え方を、聞いた上で、訓覇さんの好意で長野県の視察団（福祉関係者）に便乗して、高齢者のための集合住宅サービスハウスを見学することが出来た。

我々が訪ねた Vinter Tullon というサービスハウスは、179世帯の老人が住める高齢者向けのアパートで、かなり大規模なものであったが、所長自らが、これは失敗例ですと説明をしてくれた。今スウェーデンでは、老人にはなるべく少人数（5～6）で、しかも、地域社会の中で暮らせるようにとの配慮から、小規模なグループハウスの設置に向かっている。これは老人の孤独化を防ぐと同時に、老人の自立心を尊重する必要からだと言ってくれた。

サービスハウスにしても、老人たちは入居者であり、個々が独立した家を構えているのであって、収容しているという考え方はない。職員も入居者のニーズを把握することが重要な仕事であって、そのニーズにあった援助をどうするかを考え、実行するために配置されているのである。

ここでも「求められない援助はするべきではない」精神に徹しているのである。このような福祉制度にしても、長い年月、調査に調査を重ねて作られたという。したがって、日本などでよく云われる「スウェーデン型の高福祉高負担に国民は不満をもっている」という言葉は一度も聞かなかったし、スウェーデンでは選挙中ではあったが、そのような批判はなかったように思うのである。

日本も、少産少死時代を迎え、高齢化社会を迎えることは明白である。制度を云々する前に日本型の“親ばなれ、子ばなれ”について、真剣に考える必要があるのではないかと感じた次第である。

(1991.10.2.)

(愛知県衛生部 健康の森推進局次長)



向かって右端が訓覇さん



車椅子の婦人と語るは筆者



スウェーデン・サービスハウス  
「VINTERTULLEN」